

大学生時代の矢部貞治（2）

A Basic Study on Teiji Yabe's student days at Tokyo Imperial University (2)

大 谷 伸 治*

Shinji OHTANI*

要 旨

本稿の目的は、矢部貞治（東京帝国大学法学部教授・政治学）が大学生時代に受講した講義を特定し、教授たちからどのような影響を受けたのかを考察することである。（2）では、吉野作造（政治史）、上杉慎吉（憲法、社会学）、美濃部達吉（憲法）、田中耕太郎（商法）からの影響を考察した。

キーワード：矢部貞治 吉野作造 上杉慎吉 美濃部達吉 田中耕太郎

（3）「人道主義的社会主義」者としての吉野

さらに、矢部は「人格の完成」とキリスト教にめざめた一高時代に、実は吉野との初対面を果たし、すでに人格主義を説かれていた。3年生の時に、帝大の青年会館で開催された基督教青年会の共助会という「高等学校と帝大及先輩との間の友情を土台とした会」の例会に参加し、「吉野作造さんは雑談の様なことをされた。然しとにかく社会運動の根底に人格の必要なことを説かれた⁴¹⁾」という（1922年10月7日条）。矢部の吉野との初対面は、キリスト者、社会運動家、「人道主義的社会主義」者としての吉野だったのである⁴²⁾。

これは、社会民主主義との調和をめざした矢部衆民政論に対する吉野の影響を考えるうえできわめて重要である。矢部は学生時代に少なくとも2回、吉野が原則毎週金曜日夜に開いていた面会日に自宅を訪問し、そこで吉野の「人道主義的社会主義」に触れていた。

1回目は、政治史講義が終わって間もない12月初旬の夕方、友人とともに訪問した。「ラッセルの「ローズ ツー フリーダム」についての話や、ギルドソーシャルイズムのことや、日本の労働党のことや、ラディカリスト インテリゲンツィアの政党のことなどについて話を聞いた。殊に最後のワシントンやグラッドストーンやなど偉人の伝記のことなどについて感銘深い教訓を得た。非常に敬服した。帰ったら十二時前だっ

た⁴³⁾」（1923年12月6日条）。矢部は夏休みにまとめた代議制度研究ノートで、ラッセル（Bertrand Arthur William Russell）の *Roads to Freedom* とイギリス労働党党首マクドナルド（James Ramsay MacDonald）の *Parliament and Revolution* を参照しており、特に後者は最も長文で多くの箇所を抜粋していた⁴⁴⁾。吉野の話が、矢部の認識をより深めるものであったことは想像に難くない。年明けには、実際にマクドナルド労働党内閣が成立した。矢部は、「日本の政治と二世紀位違ふ」（1924年1月20日条）、「世界最初のプロレタリア内閣だ。その閣僚の多くはその前身が職工、労働者である。人類史上の大いなるエポックだ。何をなすかは刮目に値する」（1月24日条）と、大きな期待を寄せた。矢部はすでに社会民主主義に大きな関心を寄せていたのである。そして、そこには吉野の影響があったのである。

2回目は3年生の冬である。矢部は文官高等試験（行政科）合格後、研究者の道を志す。しかし、大学に残れない可能性もあった。その場合を想定して、「無産政党ノ為ニ働ク様ナ方法ヲ考ヘル為ニ吉野作造博士ヲ訪問スルコト」にしたのである（1925年12月7日条）。矢部の社会民主主義に対する思いは並々ならぬものであった。そして、その先駆者として第一に頭に浮かんだのが吉野だったのである。矢部の質問に対する吉野の答えはこうであった。「無産者政治ノ為ニ

* 弘前大学教育学部社会科教育講座

Department of Social Studies Education, Faculty of Education, Hirosaki University

働ク手段ハ現在日本ニテハ何カト云フ問題ニ対シ、先生ハスルコトハ沢山アル（殊ニ無産者ノ教育ガ最も必要ダ）ガ自ラ生活費ヲ得テ働ク仕事ハナイト云ハレタ。従ッテ何等カノ仕事ニツイテ之ヲ如何ニ無産者運動ノ為ニ用フルカヲ考フベシト云フノデアル。先生ハ又階級ハ必ズシモ害ニアラズ、現代ノ階級ハ続ケルコトハ出来ヌガ、他ノ階級ハ無クスル必要モナク又無クスルコトモ出来マイト云ハレタ。政治ヲ導ク要諦ハ如何ナル概念ヲ定メテ之ガ正、之ガ不正トナスハ斷ジテ不可ダトセラレタ。朝三暮四ヲ以テ秘訣トスルト云ハレタ。（俺ハコゝニ實際問題ニ於ケル老大家ヲ見ルコトガ出来ルト思ッタ）ソノ他色々有益ナ話ヲ聴イタ。〔中略〕先生ハワザワザ卒業後何ヲスルカトマデ聞イテ下スッテ俺ガ大学ニ残リタイト云ッタラ二三ノ助言ヲ与ヘテ、スルコトハ幾ラデモアルト奨マシテ下スッタ。ソシテワザワザ玄関迄他ノ人々ヲ措イテ送ッテ下サレタノニハ感涙シタ」（12月11日条）。

もとより矢部は研究者になってから、吉野を批判するようになる。日記では、吉野の著書・論文を2つ批判している。1つ目は、『現代政治講話』である。「先生の知事公選反対論は俄に賛成出来ない。論拠が極めて曖昧不明である。又分権主義徹底の手段として旧藩主の帰国を提唱すとせられることも問題であらうと考へる。事の可否も問題だがそれよりも一層、帰国を強制することが可能なりや否やが先決問題だ。／又民主主義の政治とは必ずしも民衆の参政にはあらずして、民人の利害要求が政治に現はるゝことにありとして民主主義なるものをその実質に依って定義せんとせらるゝことも問題である。之は寧ろ形式の問題ではあるまいか⁴⁵⁾」（1926年9月4日条）。2つ目は、かの有名な「憲政の本義を論じて其有終の美を為すの途を論ず」（1916年）である。「随分長くて午後一時半迄かゝった。然し色々面白いと思った。要するに先生はデモクラシーを日本国体と妥協せしむる為にこの論文を書き名を捨てゝ実を採られた感がある。その為デモクラシー自身の立場より見れば正鵠を失してゐると思ふ」（1927年9月4日条）。こうした吉野批判をもとに、矢部は助手論文「制度としての衆民政」を書いたのは周知である⁴⁶⁾。

しかし、矢部が助手論文を書き終わった直後、吉野の『無産政党の辿るべき道』（1927年）を読んで、「之は非常にいゝ先生のシステムが出てゐると思ふ。早く読んでみたら今度の論文に引用してもよかった」（1928年2月16日条）と記しているのは注目すべきである。やはり矢部にとって、吉野は「人道主義的社会主義」

者であったのだ。助教授になってからも、「午食ハ御殿で喰べて吉野先生から無産政党の財政問題や今日問題、共產主義者の戦術等面白い話を沢山承った」こともあった（1928年12月15日条）。

吉野没後、矢部は論文「多数決の社会的機能」（1934年）の註で、吉野の「現代政治思潮」（1928～29年）を取りあげ、「凡ゆる人間の誠実さと無限の道徳的発展性とを確信せる最も顕著な思想家の一人は故吉野作造博士である。博士はこの人生観を前提とし、暗殺・戦争によらざれば社会の疏通不可能なる如き封建専制政を排斥し、抱負経綸に拠て民衆の良心に訴へ、「修訂の機会を抱負にし、少しでも良い考が順次に頭角を顕はすことを可能ならしめる意味に於て……一種の貴むべき合理的根拠を」多数決の中に見出し、何よりも教育的効果を重視せられるのである」と評価している⁴⁷⁾。矢部はここで、無産者・無産政党には直截触れてはいない。しかし、この論文は、社会民主主義と調和する共同体的衆民政論のための多数決原理を論じたものだった。だとすれば、無産政党のために働こうとして吉野から「殊ニ無産者ノ教育ガ最も必要ダ」と聞いていた矢部が、ここでいう吉野の「民衆」が無産者をも想定していることを十分承知の上で、自説を補強するものとして吉野を引用したと考えるべきである。「人道主義的社会主義」者として活動した晩年の吉野を慕い影響を受けた矢部の為せる技であったといえよう。

3. 上杉慎吉 ―社会学と多数決論―

1年生の時の日記を見ていると、上杉慎吉と美濃部達吉も気になる。矢部はどちらの憲法講義も受講した。競争講座だったからである。

憲法講座は1920年度に増設され、美濃部が新たに憲法第二講座兼担となり、初めて東京帝大で憲法講義を担当した。ただ、この年は上杉が外遊中だったため、上杉帰朝後の1921年度から「憲法第一講座（上杉教授）及び第二講座（美濃部教授）のいずれを聴講して受験するも任意とし、その授業時間は止むを得れば衝突するも差支えなしとする⁴⁸⁾」正真正銘の競争講座となった。憲法の競争講座は、新聞でも報じられるほど「日本の学界に極めて興味ある問題として期待されて⁴⁹⁾」おり、学生の間では「両博士の学説の争ひをきくのも興味ある事⁵⁰⁾」として、矢部のように両方の講義を受けた者も一定数いたようだ。

では、矢部はどちらの憲法講義に惹かれたのだろうか。日記を読む限りでは、上杉に惹かれていたように

一見見える。日記には、美濃部の講義の感想や人物評がほぼ見当たらないのに対し、上杉のそれに対する好意的な記述が複数見られるからである。たとえば、講義最終日の記述を比べてみると、美濃部に対しては「美濃部博士の憲法講義が終った」（1923年11月24日条）と簡潔な事実を示す一文のみだが、上杉に対しては「今日で上杉博士の憲法の講義が終った。最後の訣別の言葉を悲痛な態度でしみりと話された。一同ホロリとした」（11月22日条）と同情的である。さらに、3年生（1925年度）の4～5月にかけて上杉の憲法（書名は不明）を読んでいる⁵¹⁾。そして、冬学期に受講した社会学については、「生物としての人の起源につき興味を覚えた」（1926年1月12日条）、「益々生物学に興味を覚えた」（1月20日条）、「気候、地理と人間との関係について可成り詳しい話を聴いた。実に興味を惹かれた。それと同時に、南洋の暑さの中に衣食住の何の心配もなく寝て暮す土人の生活が恋しくなった」（1月27日条）と、かなり興味を抱いている。

矢部は上杉憲法学の方に惹かれていたのだろうか。主観的には否である。矢部は、上杉が亡くなった翌日弔問し、「僕自身ハ博士の学問的立場にハ大きな疑惑を持つものであり、殊に博士の中にハ多分にデマゴグ的な一面のあるのに感心しなかったのであるが、その悠容たる志士の面影と人間味とには一種の懐きさを持ってゐた」と記している（1929年4月8日条）。人柄には親しみをもっていたから「ホロリ」と同情こそしたが、学問的には決して受け入れうるものではなかった。

ならば、なぜ3年生の時に、上杉の憲法を1ヶ月もかけて読んだのだろうか。それは高文試験（行政科）のためであった。行政科の憲法の試験委員を長年務めていたのが、上杉と清水澄だったからである⁵²⁾。矢部が1年生の時から高文試験を受けるつもりでいたのかはわからないが、上杉の憲法講義を受けたのは、美濃部との学説争いに対する興味のみならず、高文試験対策でもあったのかもしれない。

とはいえ、矢部が上杉の社会学＝「相関連続」論に興味を抱いていた点は見逃せない。上杉が社会学講義を担当したのは晩年である⁵³⁾。しかし、今野元氏によれば、上杉は国家法人説を唱えていた最初期から社会学に関心をもっており、特にそれを強く看取できるのが論文「多数決⁵⁴⁾」（1904年）だという⁵⁵⁾。実は、矢部はのちに論文「多数決の社会的機能」（1934年）の註で、この上杉の多数決論文を取り上げてこう述べている。「穂積八束博士（法協17ノ3）の機械的多数決

論を排して有機的な立場を主張されるのは卓見であるが、多数決を以て「全体を以て全体を支配」するところの「天理」（91）とし、稍もすれば個別性を看過せられる結果、必ずしも多数決を必要としない神秘的専制哲理への契機が生ずるのである⁵⁶⁾」。

矢部はここで上杉を2つの点で評価している。1つは、上杉の有機体的社会観への評価である。矢部が理想とした国民共同体は、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの「中間形態」であった。したがって、矢部にとって、一体的共同体は先験的に存在するものであったから、上杉の有機的社会観は首肯しうるものだったのである。しかし、矢部はゲゼルシャフトの側面、すなわち個々人の分化的自我意識をも同時的前提としたから、上杉の有機体論が個別性を看過し専制への復古になりかねないことに対しては批判を加えたのである。

もう1つは、穂積の機械的多数決論を、上杉が正しく批判し斥けたことへの評価である。穂積の多数決論は、多数決批判論であった。穂積は「多数決」と「合意」を対比的に論じた。多数決を「多数者ノ意志ヲ以テ少数者ノ意志ヲ拘束スルノ謂」、合意を「多数ノ意志ノ合一スル」こと、すなわち相反する性質をもつものと定義して、多数決は自由意志に反して暗愚な民衆への服従を強いられる「圧制」だと断じた⁵⁷⁾。つまり、穂積は全員一致の「合意」を理想としたのである。これに対して上杉は、穂積の主観に反し、社会契約説と軌を一にする機械的社会観に立脚していると批判し、全員一致論を斥け、多数決を擁護した。矢部はこれを評価した。

なぜ矢部は全員一致論を斥けるのか。反論を想定してこう述べる。「一見最も個人自律を大ならしめるが如く見ゆる全員一致は、実は社会秩序の存立を一人の恣意に依存せしめ、社会秩序を解体して自然的暴力の支配に導くところのものに過ぎず、それは実は専制と紙一重の隔たりにほかならぬ」。矢部にとって、「多数決は専制と全員一致の中間に在るのではなく、この両者に対立する」ものであった⁵⁸⁾。

では、専制でも全員一致でもない、矢部の理想とする多数決とはどのようなものだったのか。「人間生活の最高目標が道徳的人格の発展に存し、道徳的人格の発展が畢竟各人の意思の自律の上にのみ可能とする」ような人生観に立って、「凡ての人の内在的意思と人格の自律を認めつつその人格と体験を通じて社会生活秩序を実現せんとし、共同生活秩序の内容の建設・保持を全員の参与の上に行はんとする」ものであ

り、「恒久的機構として本質的に合理性を持つ」ものであった⁵⁹⁾。既述の通り、矢部はここに註を付け、吉野作造「現代政治思潮」(1928～29年)を評価した。つまり、矢部の多数決論は、穂積(全員一致)と上杉(専制)の批判の上に、吉野に依拠して成り立っていたのである。

なお、吉野は「現代政治思潮」で、「自律的進化と云ふことを十分に認識してゐないと、動もすれば現実と理想との混同又は現にあるものと当にあるべきものとの弁別の錯覚を来たし、飛んでもない間違を生ずることがある」として、「現にあるものを当にあるべきものと速断するの謬^{あやまり}」の例に、「国家を最高の道徳なりなどと唱へ、現に一切の最高価値を帯有するものなるかの観念を流布して国家に関する自由の批判を封ぜんとするが如き」ことを挙げている⁶⁰⁾。明らかに上杉批判である。上述の矢部の上杉批判も、この吉野の言葉を意識したものだったと思われる。しかし、矢部は本質的には吉野の言葉を理解していなかった。上杉を乗り越えることができていなかった。というのも、かつて拙稿で論じたため詳細は省くが、戦時期の矢部は窮極の理想は地上においては把握できないといいながらも、政治を国家現象とし国家を「最高の社会」と定義付けた結果、窮極の理想を現実の国家に求めてしまったからである⁶¹⁾。まさに吉野の上杉批判の通り、「現実と理想との混同又は現にあるものと当にあるべきものとの弁別の錯覚を来たし、飛んでもない間違を生じて、時局に迎合していったのである。かつて拙稿では、その原因はヘーゲルと筧克彦に範型を求めた結果だとしたが、学生時代に上杉の社会学に興味を抱いていたことも新たに加えられるとみてよい。

そもそも矢部と上杉はともに、社会に「形式」を与えるものとして、ルソーの一般意志(上杉は「体制意志」と呼んだ)を指定した点で一致していた⁶²⁾。両者が全員一致論批判で共闘できるのはそれゆえであった。いくら全員一致したとしても、それは個々人の特殊意志の総和である「全体意志」でしかないからである。

上杉の「体制意志」論を支える「相関連続」論を、矢部は講義で聴いた⁶³⁾。上杉の社会学講義ノートには、「Rousseauノ社会契約説ハ彼ノ独得ナル社会学デアル、ソノ Volonté générale ノ説ハ不朽ナル社会学上ノ定説デアル」とある。さらに、矢部が興味を抱いた生物学の箇所では、生物進化論にもとづいて、クロボトキンの「生存競争ノ最適者」とは「弱者モ愚者モ相共ニ団体ノ幸福ノ為ニ相助ケ合フ道ヲ知ル者デアル」との言

葉を紹介し、「生物ノ社会的精神ハ生存競争ト同ジク自然ノ法則ナルハ生物ヲ観察スレハ直チニ分カル、而シテ常ニ闘フ者ヨリハ常ニ共同スル者ハ最適者ナルコトハ明ナリ」として、「人ハ社会的動物」、「社会ナクシテ個人ナシ——相関ト連続」、「相関ト連続ハ個人ノ意志活動ニヨリテ存ス社会的ナルハ之レ個人ノ心」としている⁶⁴⁾。牧野英一が進化論によって、共同生活における社会と個人の調和を説いたのと重なる。学生時代の矢部が興味を抱くのも頷ける。

とはいえ、ここで注意したいのは、上杉が主観的には、個人の意志を否定していないことである。にもかかわらず矢部は、上杉の多数決論が個別性を看過しており、「多数決を必要としない神秘的専制哲理への契機」を生ずると否定した。なぜだろうか。

鍵となるのは、上杉の多数決論文が書かれた時期である。これはいまだ国家法人説論者だった最初期の論文であった。しかし、上杉は周知の通り、留学後に天皇親政論者に変身を遂げた。その時に、多数決も否定論に転じたのである。そして、「体制意志」論とデモクラシーを区別して、デモクラシーを完全に否定した⁶⁵⁾。こうした上杉の思想遍歴は当時から周知の事実であった。つまり矢部は、「多数決を必要としない神秘的専制哲理」すなわち天皇親政論者に転身した後年の上杉を念頭に置き、その顕著な事例として、上杉の多数決論文を批判したのであった。よって、矢部はそれ以上上杉の検討をしなかった。1920年代の上杉が「相関連続」論で個人の意志を尊重すると書いていたとしても、デモクラシーを否定し続けたことから、「学問的立場にハ大きな疑惑を持つ」「多分にデマゴグ的」と一蹴して、その真の問題を見ようとしなかった。新体制期に、自らの衆民政論が論敵であった藤澤親雄の「日本政治学」と類似していることに気付かなかったのと同様である⁶⁶⁾。デモクラシー否定論者を色眼鏡で見て、真剣な検討を怠ったのである。

このように矢部は、主観的には上杉の学問的立場は受け入れられないといいながらも、学生時代に興味を抱いた社会学＝「相関連続」論・「体制意志」論は暗に継承していた。戦時期に主観的には自由を擁護しながらも、実際には自由を蹂躪してしまうことに気付かなかった原因は、ここに胚胎されていたといえよう。

4. 美濃部達吉一代議制度研究ノートと政治家の夢

一方、美濃部達吉の憲法講義には、矢部は何ら興味をもっていなかったのだろうか。否である。たしかに、日記には美濃部に対する評価は書かれていない。

しかし、美濃部の憲法講義が制度論を中核とする矢部政治学の基礎を形成したといっても過言ではない新史料を発見した。それが牧野と吉野の節で触れた代議制度研究ノートである。実はこのノートは、資料名は「昭和期」となっていたが、1年生の夏休み中に取り組んだ代議制度の研究をまとめたノートであったことを突き止めた。

B 5 版の大学ノートで、表紙には「議会制度研究 memo」と記されている。見開きの右頁に本文を記し、左頁には註を記す形式で書かれている。本文の右上には「No.」欄があり、頁番号が記入されている。右側の最後の頁「No.47」まで記入されているが、本文は「No.46」で終わっている。1 頁目には以下の通り、頁を明記した目次がある。

代議制度存在ノ意義

- | | |
|---------------|----------|
| 1. 理論的意義 | P.P.1-4 |
| 2. 歴史的意義 | P.P.5-7 |
| 3. 代議制度否認論ノ価値 | P.P.8-11 |

代議制度方法論

- | | |
|-------------------------------|-----------|
| 1. 代理説ト代表説
（職能的代表力市民的立場力） | P.P.12-16 |
| 2. 二院制ト一院制 | P.P.17-18 |
| 3. 地縁主義ト職能主義（人口代表ト利益、階級、正当代表） | P.P.19-24 |
| 4. 直接選挙主義ト間接選挙主義 | P.25 |
| 5. 制限選挙主義ト普遍選挙主義 | P.P.26-29 |
| 6. 平等選挙主義ト差等選挙主義 | P.30 |
| 7. 任意選挙主義ト強制選挙主義 | P.P.31-32 |
| 8. 秘密選挙主義ト公開選挙主義 | P.33 |
| 9. 少数代表法ト多数代表法ト比例代表法 | P.P.34-41 |

新国家学説ト代議制度

- | | |
|-------------------------------------|-----------|
| 1. Cole, Hobson, Richard Roberts ノ説 | P.P.42-46 |
|-------------------------------------|-----------|

結論⁶⁷⁾

本文の字も他のノートに比べて丁寧な字であり、清書したものであることが窺える。

さらに、参照文献として、牧野英一『日本刑法』（初版1916年、修訂第16版1923年）と吉野作造「選挙理論の二三」（1923年）に加えて、美濃部達吉の『憲法撮要』（1923年）と「独逸新憲法に就いて」（1923年）などが挙げられていた。いずれも1年生夏学期に講義を受けた教授の著書・論文である。

前述したように、牧野『日本刑法』は刑法講義の教科書であった。ノートには、「刑法ノ進化」について

『日本刑法』34～45頁を参照するよう書かれていた。何版か記載はないが、矢部が受講した1923年度にあたる増訂第16版の当該頁を確認したところ、たしかに緒論第3章「刑法ノ進化」であった。

『憲法撮要』も、美濃部が1923年度講義のために新たに執筆した教科書であった。美濃部は、憲法講座が増設され第二講座兼担を命じられた1920年度から、東京帝大で憲法講義を担当し始めた。1922年度は欧州出張のため兼担を国法学講座の野村淳治に譲ったが、帰朝後の1923年度に再び兼担に復帰し⁶⁸⁾、『憲法撮要』を急遽執筆したのである⁶⁹⁾。

吉野「選挙理論の二三」と美濃部「独逸新憲法に就いて」は、『国家学会雑誌』1923年5月号と6月号の巻頭論文であった。矢部が講義を受講している時に発表されたものだった。

これらの中で、矢部が最も頻繁に引用したり参照を指示したりしているのが『憲法撮要』であった。参照を指示しているのは、「Referendum」「立憲政体ノ発達及其ノ中心思想」「両院制」「地縁主義、職能主義」「制限選挙主義ト普通選挙主義」「平等選挙主義ト差等選挙主義」「任意選挙主義ト強制選挙主義」「秘密選挙主義ト公開選挙主義」「少数代表法ト多数代表法ト比例代表法」である⁷⁰⁾。目次で示されたほとんどの項目であることがわかる。矢部の代議制度に対する基礎的理解は、美濃部『憲法撮要』で形成されたものだったのである。矢部は日記では美濃部にほとんど言及しなかったものの、大きな影響を受けていたのだ。とすれば、この代議制度研究ノートは、1年生夏学期に最も感銘を受けた教授たちから多くを学んでまとめられたといえる。

それをふまえて日記を読んでみると、夏休み中に「議会制度」「代議制度」の研究に取り組みまとめたことがわかった。「俺は夏休み以来猛烈な暑さの中に議会制度の研究の為に諸種の書を読んだ」（1923年8月7日条）。「朝から夕方まで議会制度について此の夏休みに研究したことを統一して書いた。材料をあまり読んでゐない上に實際上の知識が至って浅いので到底なつてゐない。然しまあ一先づ纏めて置いてこれから三四年計画で段々訂正増補して行くつもりだ」（9月7日条）。「代議制度の研究に非常に興味を覚える。感激をもって毎日勉強出来る」（9月9日条）。「午前中、代議制度の研究に没頭する」（9月12日条）。「今日で一先づ代議制度の研究を終った。俺の研究の骨子となつてゐるのは、地縁主義と職能主義の問題だ。その他選挙区制の問題、代表代理二主義の問題もある。

まあ一先づ纏まった。こんな大研究が一月や二月で出来ないことは分り切っている。これから十年計画で完成するんだ」(9月13日条)。発見したノートはこの時まとめられたものと見て間違いあるまい。とすれば、この代議制度研究ノートは、矢部が入学して初めて受けた講義の中で最も感銘を受けた講義(牧野の刑法、吉野の政治史、美濃部の憲法)での学びをふまえて、夏休みに教科書や関連文献⁷¹⁾を収集・精読してまとめた最初の草稿であったといえよう。

また、「此れから三四年計画で段々訂正増補して行くつもりだ」との言葉通り、挟み込まれたメモの1つは、1923年11月27日に開催された緑会弁論部主催の議会制度問題講演会⁷²⁾を聞きに行った時のメモであった。矢部は日記に「学生が二人と菊池勇夫氏蠟山政道助教授と吉野作造博士とがやった。皆非常に面白かった。殊に蠟山氏のは大いに暗示を与へて呉れた」と記している(1923年11月27日条)。メモには、安井彰、蠟山、吉野の発言の要点が速記されている⁷³⁾。

なお、このノートをまとめている最中に、関東大震災(9月1日)が起こった。矢部は帰省先の福島県若松で被災した。幸い家は無事だったが、東京のことが気がかりであった。当日夜にある会合から帰った父から東京の惨害を聞いた後、福島新聞や警察署の掲示で惨害の大きさを少しずつ把握し、9月6日の日記に知り得た情報をまとめ、震災後の復興についてこう記した。「社会思想は浮薄で何れに帰してよいか分らず、資本と労働の争は白熱化し、共産主義と社会主義の運動蔓延し、人心安かならず。政治に於ては大戦の余波を受けて外交に内治に行き詰れるもの多く、政党政治の弊はその極に達し、宗教道德は只形骸のみとなり、悉く之世紀末の有様を暗示してゐた時、俄然この大震災起って大帝都を灰燼に帰したのである。我輩は実に恐怖と畏敬とを痛感しないことを得ない。天帝は之によって何を我等に教へんとするものであるか。我等は之によって如何なる教訓を得べきであるか。前加藤首相死して、山本内閣組閣中に起った此の惨事は我国政界に対して何事を戒めんとするのであるか。我等日本青年たるもの思ひを秘めて時代を達観し最高の真と善に向つて渾身の勇を奮ふ時である。大変事を革命と見て、今後社会が如何に発展するかは分らない。然し日本はこれからだ。行き詰った東京を焼き払って大東京を再建する如く、従来の腐敗せる思想を文学と道德と政治とを悉くを打ち壊して更に新しい文化を建設すべき時だ。根本的に健全なる思想を養ふべし。義を知らしむる文学を起すべし。公明正大、根本の正義に礎を

置く政治を行ふべし」(1923年9月6日条)。

矢部にとっての震災復興とは、社会資本の復旧のみならず、思想・文学・道德・政治などのあらゆる分野にわたって従来の腐敗したものを浄化し、根本的に健全な「正義」に礎を置く新しい文化を建設することだったのである。この頃の矢部は、「俺は来るべき次の時期に於て真剣な政治家となって天下国家に臨まんと志してゐ」た(8月7日条)。したがって、このような決意のもとまとめられた代議制度研究ノートは、将来「真剣な政治家」になって、政党政治の弊を正し、「公明正大、根本の正義に礎を置く政治」を実現するための第一歩であったといえよう。

矢部は結局政治家ではなく政治学者になるものの、「これから十年計画で完成するんだ」との言葉通り、代議制度研究を論文にまとめながら共同体的衆民政論を構築していくことになる⁷⁴⁾。この意味において、政治学者矢部の理論的基礎はここで形成されたと考えられる。本ノートをより仔細に分析すれば、美濃部や吉野からの連続／非連続という視点から、矢部の思想形成過程をより深めることができるだろう。

5. 田中耕太郎 ―法哲学と信仰―

2年生の検討に移る。

夏学期に最も感銘を受けたのは、田中耕太郎の商法であった。講義が最終盤にさしかかった頃、「田中耕太郎教授の会社法講義は非常に面白い。法律学(或は法律哲学)と云ふものゝ真の面白味が分る様な気がする」(1924年9月25日条)と感じるようになり、最終日には、「田中さんの商法の講義が終った。田中耕太郎氏の講義は俺が之迄聴いた講義の中で一番俺を動かしたものである。田中さんの人格がさうである如く、末葉に拘泥することなく物の真髓に突き入って而も底恐しい位の徹底を持つところに何物にも換へられぬアトラクションがある。法律哲学の妙味は氏の講義によって初めて味はひ得る。概念法学と自由法学、社会法学等との軽薄さがよく分る。無味乾燥と称せられる商法を頗る興味を持って聴いたと共に大いなる人生の暗示を与へられた様な気がする」と記したほどであった(10月28日条)。

このような田中への激賞は、矢部の助手時代の日記にも見られる。矢部は、田中の著書『法と宗教と社会生活』(1927年)を恵贈され、「他の勉強をやめて早速最初の部分を五十頁ばかり読んだ。僕の悩める法と宗教の問題、宗教と社会生活の問題、宗教と自己の職業の問題、更には国家の組織の根本問題がこの中に期待

される」（1927年2月3日条）、「その暇々を以て田中先生の著書を耽読した。今その本論を読み了へて、感極って云ふところを知らない。かくの如き敬虔なる、かくの如き莊嚴なる、かくの如く深奥なる、而してかくの如き明晰なる書を知らない。真に之、真と善と美との宗教的調和の上に立つの著作である。人格と合体せる著作である。云ふところを知らぬ」と激賞した（2月8日条）。1年後、助手論文「制度としての衆民政」の執筆中には、「論文は本格的部分を書いてゐるのであるけれどもどうも意に満たない。終始心を抑へられてゐる。未熟な論文を発表することの憂鬱をつくづく感ずる。夜は田中先生の法と宗教と社会生活を読み返す。非常に色々の示唆を二度読んで受けることが出来る」と記している（1928年1月31日条）。たしかに、「制度としての衆民政」の註には、「制度の性質に関して茲に述ぶる所は、多くの示唆を次の諸書より得た」として、その1つ目に『法と宗教と社会生活』が挙げられている⁷⁵⁾。本格的検討は別稿を期すが、矢部の思想形成期しかもその根幹に関わる制度論に対して、従来言及されてこなかった田中法哲学からの影響が大きかったことは間違いなく、それはすでに学生時代の講義から始まっていたと考えられる。

なお、助教授時代に、源川氏が言及した「カトリック研究会」（正式名称は「東京帝国大学カトリック研究会」）にプロテスタントの矢部が参加するようになったのも、田中耕太郎の影響が大きかったと思われる。直接のきっかけは1929年5月7日、学生の中尾文策⁷⁶⁾がカトリックの洗礼を受けるのに矢部に出席を依頼してきたことにあった。翌日、矢部は麻布霞町の天主教会に行つて洗礼に立ち会い、この帰途に中尾からカトリック研究会の雑誌『光』をもらった。この洗礼の場に、田中耕太郎が弟の受洗に立ち会うために

偶然居合わせていたのである。はたして矢部は、6月3日「田中先生に伴はれて」初めてカトリック研究会に出席した。

学生時代から助手時代にますます田中法哲学に惹かれていたということもさることながら、田中が内村鑑三と訣別してカトリックに改宗したという経歴⁷⁷⁾も、矢部には意味があったと思われる。矢部は中尾から『光』をもらった時にこう記しているからである。「プロテスタンティズムに対する非難は僕も共鳴措く能はぬものがあるが、何故に公教会の權威を認め之に承服するかは知らぬ。絶対の宗教の存在すべきを認むるも、それが何故にカトリックなりやが分らぬ。団体主義に無条件で組し得ぬ。人世に於ける絶対価値の実現を容易に信じ得ぬ。カトリックの色々なドグマをそのまゝに承服し得ぬ。僕の悩みはカトリックかプロテスタントかにハない。カトリック即クリスチャンたるか然らざるかにある。信仰を一度樹つれば學問と之が統一されねばならぬ。容易にそこまでの信念を得ぬ。とにかくにも少し近代人のなやみをなやむつもりだ。併しカトリックの教義と世界観とに注意を怠るまいと決心した」（1929年5月8日条）。矢部は、プロテスタントの立場から、カトリックがクリスチャンたりうるかどうか見極めようとしていたのである。だとすれば、「真と善と美との宗教的調和の上に立つの著作」「人格と合体せる著作」を著し、自らの「体内の血の沸くのを覚え」させる田中耕太郎をして内村鑑三と訣別・改宗せしめたカトリックに興味を覚えつつ、それが信仰にたりうるものか見極めようとして、田中に誘われたカトリック研究会に参加したのではないだろうか。詳しい検討は他日を期したい。

(3) に続く

- 41) 前掲「吉野日記」1922年10月9日条にも、「七日〔中略〕四時森明君の共助会の例会に出席す 会館にてなり」と記されている。
- 42) 「人道主義的社會主義」者としての吉野を論じた研究として、小嶋翔「『社會主義者』としての吉野作造」（『日本史研究』687、2019年）。
- 43) 前掲「吉野日記」1923年12月7日条には、「六日（木）事なし 夜は特別学生面会日とす 来訪者数名」と記されている。
- 44) 前掲「代議制度研究ノート」第10～13、16～20、23、28、46画像目。また、矢部は助手になった際に、吉野を訪問をした際にも挨拶に行き、「政治学の助手の注意を聞く。親切に感涙する位に教示された。先生はラッセルやハーンショウを推薦せられた」という

（1926年4月16日条）。

- 45) 矢部が批判している箇所は、「地方長官公選論」（初出『中央公論』1925年12月号）である（『現代政治講話』〔みすずリプリント版〕、みすず書房、1988年、175～181頁）。
- 46) 前掲『近衛新体制の思想と政治』17頁。
- 47) 矢部貞治「多数決の社会的機能」（二・完）（『法学協会雑誌』52-8、1934年）46頁。
- 48) 前掲『東京大学百年史』部局史1、173頁。
- 49) 『東京朝日新聞』1921年5月23日夕刊2面「問題の競争講座 沙汰止みか 帝大両博士の憲法論 角力のように浮調子にしたいと 上杉博士の弁解」。
- 50) 『帝国大学新聞』1925年1月31日2面「少壮学徒輩出に 氣運新たなる法学部 相変わらず激烈な競争試験」。

- 51) 1925年4月27日条に「少シ上杉慎吉ノ憲法ヲ読ミ初メル」とあり、以降は上杉の名は見られないが、4月28日、5月13、14、17、20、22日に憲法を読むという記述がある。書名は書かれていないが、『新稿帝国憲法』（有斐閣、1922年）か、『新稿憲法述義』（有斐閣、1924年）であろう。
- 52) 堀之内敏恵「高等試験の試験科目「憲法」に関する基礎的研究」（『リベラル・アーツ』11、2017年）17頁。しかし、上杉は矢部が受験した1925年は病気のため野村淳治に変わり、口述試験は清水が主に担当した（「矢部日記」1925年11月6～7日条）。美濃部は、行政科については行政法の委員で、矢部は美濃部の口述試験を受けた（11月11日条）。そのため矢部は、3年次の5～6月に美濃部の行政法に数回潜り込み（5月20日条、5月22日条、6月3日条、6月24日条）、美濃部の『行政法撮要 各論』上冊（有斐閣、1923年）も読んでいる（6月5日条）。ただ、いずれも美濃部評は書かれていない。
- 53) 上杉の社会学講義は、上杉が残した講義ノートを抜粋翻刻した「上杉慎吉社会学遺稿（抜粋）」（竹村民郎編『経済学批判への契機』三一書房、1974年）で断片的に知りうる。詳しくは同書所収の上杉聰彦「公法学者上杉慎吉における社会学＝相関連続の研究」を参照。なお、CiNii Booksを検索すると、2つの私家版講義録がヒットする。上杉教授述『社会学：完：大正十四年度東大講義』（石田正七〔非売品〕、1925年、北海道大学大学院農学研究科図書所蔵）、上杉博士講述『社会学：全：大正十四年度東京帝国大学講義』（北川雄三郎〔非売品〕、1926年、東京大学社会研究所所蔵）。両書とも矢部が受講した1925年度講義の筆記をもとにしたものと推測されるが、いずれも禁帯出資料でありコロナ禍で閲覧がかなわない。今後の課題としたい。上杉の社会学＝「相関連続」論に着目して上杉憲法学を再評価する最近の研究として、住友陽文『皇国日本のデモクラシー』（有志舎、2011年）第3章、西村裕一「美濃部達吉と上杉慎吉」（河野有理編『近代日本政治思想史』ナカニシヤ出版、2014年）、五味良彬「上杉慎吉の「国体」論に関する一考察」（『法学史林』115-1・2、2018年）、森本拓「カクシテ相関連続ノ楽地ヲ発見セリ」（1）（2・完）（『山梨大学教育学部紀要』28、2018年）がある。
- 54) 上杉慎吉「多数決」（『法学協会雑誌』22-1、1904年）。
- 55) 今野元『吉野作造と上杉慎吉』（名古屋大学出版会、2018年）48頁。
- 56) 前掲矢部「多数決の社会的機能」（二・完）38頁。
- 57) 穂積八束「多数決」（『法学協会雑誌』17-3、1899年、のち上杉慎吉『穂積八束博士論文集』上杉慎吉、1913年、463～468頁）。
- 58) 前掲矢部「多数決の社会的機能」（二・完）42、47頁。矢部はここでは、シュタロゾルスキー（Włodzimierz Starosolskyj）の *Das Majoritätsprinzip*（1916年）に依拠している。
- 59) 同上、42頁。
- 60) 吉野作造「現代政治思潮」（『吉野作造選集』1、岩波書店、1995年、初出1928～29年）334頁。
- 61) 拙稿「矢部貞治と南原繁」（『史流』45、2015年）。
- 62) 上杉については、前掲住友『皇国日本のデモクラシー』112頁以下が詳しい。矢部も、ルソーの一般意志の原理のもつ意義は、「生きて流動しつつある総体意思が支配をなすといふ、その形式の原理」とする。矢部貞治「現代独逸に於ける衆民政論」（一）（『国家学会雑誌』45-10、1931年）53頁。
- 63) 上杉は憲法講義でも、「相関連続」「体制意志」は語ったはずである。1923年度の憲法講義の教科書は、「相関連続」論によって新たに体系を組み直した上杉慎吉『新稿帝国憲法』（有斐閣、1922年）だったからである。同書については、前掲五味「上杉慎吉の「国体」論に関する一考察」が詳しい。
- 64) 前掲「上杉慎吉社会学遺稿（抜粋）」244、246～248頁。
- 65) 上杉慎吉「デモクラシーと我が国体」（同『暴風来』洛陽堂、1919年）。前掲今野『吉野作造と上杉慎吉』286頁。
- 66) 拙稿「藤澤親雄の「日本政治学」」（『北海道大学大学院文学研究科研究論集』11、2011年）。
- 67) 前掲「代議制度研究ノート」第2画像目。
- 68) 前掲『東京帝国大学五十年史』下冊、718頁。
- 69) 美濃部達吉『憲法撮要』（有斐閣、1923年）序言。
- 70) 前掲「代議制度研究ノート」第4、8、9、19、23、29、30、34、35、37、38画像目。
- 71) 他に参照された邦語文献としては、中島重『多元的国家論』（内外出版、1922年）、高田保馬『社会と国家』（岩波書店、1922年）、米田実「反動政治の運命」（『中央公論』1923年9月号）、外国語文献としては、Ramsay Macdonald の *Parliament and Revolution*、Everett kimball の *The National Government of the United States*、Bertland Russell の *Roads to Freedom* である。
- 72) 『帝国大学新聞』1923年11月29日3面「真摯の気充ちた議会制度批判会 吉野教授蠟山助教授講演」。
- 73) 前掲「代議制度研究ノート」第21～22画像目。
- 74) 詳しくは、前掲源川『近衛新体制の思想と政治』第1章、前掲波田「矢部貞治における「共同体的衆民政」論の形成」（1）・（2）。
- 75) 矢部貞治「制度としての衆民政」（『国家学会雑誌』42-3、1928年）81頁。
- 76) 東京帝国大学編『東京帝国大学一覽 従大正15年至昭和2年』（東京帝国大学、1927年）によれば、中尾は1927年に入学した学生である（458頁）。
- 77) 森川多聞「田中耕太郎の思想」（『年報日本思想史』4、2005年）、同「田中耕太郎の改宗」（『日本思想史研究』38、2006年）。

〔附記〕本稿はJSPS 科研費（20K13168）の助成を受けたものである。

（2021. 8. 27 受理）